

第四次『新思潮』と成瀬正一

関 口 安 義

はじめに

大正文学史上燦然と輝く第四次『新思潮』は、大正五年二月、成瀬正一を編輯発行人として創刊された。この同人雑誌から大正期文壇の中核を形成する芥川龍之介・菊池寛・久米正雄ら、いわゆる新現実派・新理知派・新技巧派の作家が誕生したことは周知のことである。が、創刊号から同年七月号まで困難な雑誌経営に携わり、その後もこの雑誌に同人中一番の愛着を持ち、留学先から原稿や資金を送ってそれに期待を寄せた成瀬正一の人と業績については、意外と知られず、言及されることもかつてなかった。三年ほど前から私はこの作家について、芥川などとの関連上一度調べあげる必要を強く感じていた。たまたま故松岡譲氏にあてた若き日の成瀬正一書簡四十七通（新思潮同人諸兄宛、松岡・菊池両兄宛のものを含む）が、ご遺族の筆子未亡人宅にそっくり保存されていることがわかり、今回その借覧の便を得た。そして今まで不明とされた海外滞在中の消息の一端も知ることができた。そこで以下に右書簡等をも資料に、この作家の人と業績を第四次

『新思潮』に関連させつつ論じたいと思う。

第四次『新思潮』同人として、若き芥川・菊池・久米・松岡らと深い交渉をもち、自らもいくつかの習作的小説とすぐれた紀行文とを書き、後にフランス文学者となった成瀬正一は、明治二十五年四月二十六日横浜市東神奈川に生まれた。同人中最も若く、菊池より四年、松岡・久米より一年、芥川より二か月後の出生であった。本籍は菊池と同じ香川県で、先祖は藤原鎌足の血筋にあたり、その系図には新古今歌人の良経（撰改関白大政大臣）や連歌の二条良基の名が見られるほどの由緒ある家柄であった。父成瀬正恭は、草創期の慶応義塾に学び、在学中福沢諭吉にすすめられてアメリカに留学したほどの開化人であった。正恭は後に銀行界に入り、十五銀行の頭取にまでなっている。裕福な家に生まれた正一は、幼時家が東京の芝白金三光町に転居するに伴ない白金小学校から私立麻布中学校に学ぶこととなる。そして明治四十三年九月、第一高等学校第一部乙類に入學する。彼は父親の希望で

法科を第一志望としたが、この年の一高は志願者が多くてはならぬ、第二志望の文科に補欠でからも入ったのだった。

成瀬が入学した年の一高には、芥川・菊池・久米・松岡・恒藤・土屋文明・山本有三・佐野文夫ら後に筆をもって立った者が多くいて、そのクラスは文学道場の観すらあった。成瀬ははじめ補欠入学の文科は仮の籍でいずれば法科に転科することを希望していた。長男だった彼に寄せる家族の期待も、実業畑での成功にあったようだ。しかし、この年一高文科に入ったことは、彼の生涯の進路を変えることとなった。すなわち同級生菊池・久米・松岡・佐野らの影響は、彼を急速に文学に近づけ、将来とも文科志望の学生にしてしまったのである。菊池の「大島が出来る話」(『新潮』大7・6)に愛情こめて描かれている、典型的な日本婦人をおわせる成瀬の母は、息子の文学熱を知って、菊池や松岡に彼の法科なり経済なりへの転向をすすめるよう幾度も泣きついたという。後で述べるように、多血質で熱血漢だった成瀬は、周回からやかましくいわれればいわれるほど、文学の道に傾くのであった。そして大正二年七月、第一高等学校を卒業し、九月には東京帝国大学文学科に入学する。

かくて法科志望から暗れて文科の大学生となった彼は、翌大正三年二月創刊の雑誌第三次『新思潮』同人十名のうちのひとりとして名を連ねることとなる。この雑誌は山本有三と山宮允とが发起人となって創刊されたものだが、その編輯には成瀬と親しい久米が当たっていた。成瀬はここに習作三編を仮名で、翻訳一篇と日記抄を本名で発表している。いまそのリストを次に掲げよう。

題名

号

署名

未来のために(小説)

三月号

松井 春二

旧寮某室の出来事(小説)

五月号

玉木 美吉

婚禮当夜(笑劇)

七月号

小島 辰夫

仕損じた盗人(ジョン・ハンキン)

九月号

成瀬 正一

海岸の日記から

九月号

成瀬 正一

創作三編がいずれも仮名で書かれているのは、自信のなさ、ややディレッタントな傾向を示すものであろう。もっとも、芥川にしても菊池にしても、この頃はまだ本気で創作に当ろうとは考えておらず、柳川隆之介なり、草田杜太郎なりのペンネームを用いており、ことは成瀬ひとりとはいえないのである。このころからすでに将来とも作家として立つことを決意していたのは、その仲間では久米正雄ひとりにすぎなかったようだ。が、この時期に成瀬が仮名とはいえ小説二編を発表していることに注意したい。後に第四次『新思潮』で彼と創作を競う連中も、この期は戯曲(久米・菊池)、翻訳(芥川・菊池)、評論(松岡)は発表しても小説には手を染めず、芥川が五月号に「老年」を載せたのが唯一の例外になるのだ。久米・菊池を筆頭に彼らはまず戯曲を書き、しばらくして小説を書くというのがお定りのコースだった。芥川も「羅生門」や「鼻」の前に「青年と死」(第三次『新思潮』大3・2)という戯曲を書いているし、松岡もその処女作は戯曲(「罪の彼方へ」第四次『新思潮』創刊号 大5・2)だった。この点成瀬はちがっていた。彼も後になって「囚人と小さき花」(第四次『新思潮』大6・1)という質のいい戯曲を書くが、その出発は小説

であった。ことのよしあしは簡単にはいえないが、第四次『新思潮』時代の久米や菊池が戯曲的につかんだすぐれた短篇小説を次々と発表しえたことは、この期の戯曲による修練がものをいっているのかも知れない。

ところで「未来のために」は、二十枚ほどの作品である。これははじめ第三次『新思潮』創刊号（二月号）に載る予定で、目次にも題名と筆者名とが刷り込まれたが、ページ数増加のため、校正後次号廻しとなったものである。創刊号の「校正卓上」という後記で久米は、「頁数を数へちがへて予定を超過したため、やむなく松井の小説を組んだまま次号へ廻した。松井は同人の中で一番純な驚嘆を有する男で『未来のために』はその生活の断片である。どうか次号を楽しみに待つてゐて頂きたい」と断り書きしている。右の久米の文章中の「松井は同人中で一番純な驚嘆を有する男」という指摘は、若き成瀬正一の人となりの一部を巧にとらえた表現としておもしろい。さて、この作品はかなりの関係にあると思われる女との別れを描いたもので、若々しい情感や、主人公の純な態度に若干の見るべきものがあるというものの、総体的には凡作の域を出ない。そのことは同じ号に載っている豊島与志雄の *sensitive* な作品「蠱惑」と較べると実にはつきりする。この号の後記にはやはり久米の名で、「松井は成瀬となつて長篇の創作を出す筈に御座候」とあるが、翌々月の五月号には依然仮名（玉木美吉）で「旧寮某室の出来事」を発表する。これは一高時代の寮生活のスケッチというべきもので、一見後年の久米の『学生時代』の作品に似通う面もあるが、抒情性とか文章の流

暢さにおいてはとうてい及ばない。次の「婚礼当夜」は、上つすべりの喜劇である。

この時期の成瀬の精神形成に重大な影響を及ぼしたと思われるのは、ロマン・ローランとの邂逅である。ローランは若き成瀬の心の深奥をゆさぶった。彼がローランの『ジャン・クリストフ』に接するのは、大正三年の夏のことであった。この年九月号に載せた「海岸の日記から」には、「読みかけのローランのクリストフを机の上に置いてぼんやり外を眺めて居ると蚊に似た海岸の虫が室の灯を慕つて飛んで来て、私の指にとまつた」という一節が見られる。これは一夏を芥川と逗子海岸の成瀬別荘で送った時の日記だが、これより早く成瀬は芥川からこの本のシルバート・カナンによる英訳を示され、一読その魅力の虜となっていた。後に成瀬が中心となつて訳出したロマン・ローランの『トルストイ』（新潮社 大5・3・18）の序に「ある時、友の芥川龍之介が私に一書を示した。それはこの訳書のロマン・ローラン氏の『ジャン・クリストフ』であった。二三頁拾ひ読して居る中私は驚くべき魅力に捉へられて、早速丸善へ行つて長大な『ジャン・クリストフ』を買つて来て猛烈な勢で読み出した。読んで居る間私は、夢中になつて時間の経つのも考へなかつたが、読了後に、それまでにない大なる感奮を受けた。私は行くべき路を教へられたのである」とあり、この間の事情を伝えている。感激家の成瀬は、何度も繰り返してこの書を読み、ついに「敬愛し愛慕して措かないロオラン氏」（前出『トルストイ』序）に手紙を出すに至るので

ある。

「一九一五年四月十四日、東京。—謹啓—まったく未知の私がお手紙をさしあげるのをお許しください。私は東京帝国大学文学部の学生で成瀬正一と申します。ジルバート・カナンの英訳で『ジャン・クリストフ』を拜読し、私の尊敬と感謝とを申し述べたいと存じます……」(山口三夫訳)ではじまる感激に満ちたこの手紙は、いま『ロマン・ロラン全集』の「戦時の日記」の中に収められている(日本訳にみせず書房版がある)が、打算のない、その高貴な精神にローランはいたく打たれ返事を書く。「はるかな若い友よ、あなたの共感に感謝します。私は、あなたがクリストフに一人の兄弟を認められたことをうれしく思います。あなたのおっしゃることは正しい——あらゆる芸術の源泉は生、精神がつかぬいて照らし出す、神秘的な深い生なのです……」(同上訳)。

第一次世界大戦中反戦論をとまえ、その祖国にもいられない状態だったローランに、極東の一青年の手紙は大きな激励となった。こうしたことから数度に及ぶ書信が交され(ローランの手紙の一部は、第四次『新思潮』大正五年六月号に掲載された)、洋の東西を越えた、まれに見る深い精神的交流が生まれることとなる。ローランは前出「戦時の日記」にこの若い日本の友への愛情を吐露してあますところがない。

二

第三次『新思潮』は大正三年九月号をもって廃刊となり、一年

半のブランクの後、第四次『新思潮』が芥川龍之介・菊池寛・久米正雄・松岡譲・成瀬正一の五人の青年の手により創刊される。この空白期間に成瀬は一編の小説を『帝国文学』(大4・4)に載せている。「二十一の秋」である。これには「共に語りし松岡君に呈す」のサブタイトルがついており、芥川の「ひよつとこ」、久米の「三浦製絲場主」と並んで掲載された。内容は人生に懐疑と苦悶を懐いた主人公の箱根への旅を描いたもので、主観的な観念が形象化されないまま提出された未熟な作品である。

さて、第四次『新思潮』創刊までの事情については、芥川の「あの頃の自分の事」、久米の「風と月」といった小説や、松岡や菊池が折にふれて筆にしたいくつかの回想にみられるが、それらから推すと、漱石門をくぐった芥川・久米・松岡の三人が、何か発表して漱石に見てもらいたい、指導してもらいたい、——松岡は後年これを「漱石を第一の読者にして雑誌を出す」(『新思潮』回想記)というふうに表現している——ということが契機となって、仲間の漱石崇拜者成瀬を誘い、それに成瀬の強力な推薦で、当時京都にいた菊池を入れ、五人の同志的結合が成ったのである。いずれも一高以来の気心の知れた仲間であった。ここで大切なことは、芥川や久米がどちらかというと文壇登場のワン・ステップとして漱石を意識し、雑誌のことを考えたのに対し、熱烈な漱石ファンであったにせよ、まだその譽へにも接していなかった成瀬は、友情の賜物として雑誌の誕生を考えていたということである。それだからこそ事情があつてひとり京都にあつて悶々としていた菊池を同人として迎え入れることを強く主張したのであ

った。「私にとつて新思潮てふ雑誌は、吾々同人の friendship の symbol である」(大6・4・26付 松岡善謙宛書簡) というのが成瀬の偽らざる気持であつた。

創刊号の資金作りには、成瀬が大きく貢献している。すなわちロマン・ローランの『トルストイ』を翻訳出版し、百円ばかりの基金を捻出したのである。第三次「新思潮」が廃刊になつた原因は、一切を啓成社という強力なパトロンの出版社にまかせていたため、同人たちの雑誌への愛着や責任が少なかつたことや、また十人の同人が雑然と寄り集まつて同志的なまとまりを欠いたことなどにあつた。そこで今度はその愚をくり返すまいと、皆が責任を持つ意味から資金を出しあうことになり、まず創刊号に必要な経費を『トルストイ』翻訳出版から得ることになつたのである。その仕事は成瀬を中心にすめられた。当時の日本では、人道主義ブームの波に乗り、トルストイ熱は全盛をきわめ、新潮社からは『トルストイ研究』という月刊雑誌まで出ていた。それゆへこのプランは資金稼ぎにもつてこい代物だつたわけである。しかし、この仕事はそうした計算上の考えよりも、成瀬のこの本への熱烈な打ち込みがもたらしたものだつた。成瀬は大正四年の暮れも押し迫つた十二月二十一日、ローランあてに『トルストイ』翻訳許可を乞う手紙を書いた。ローランをして「北斎のスケッチを思わせる」(「戦時の日記」一九一六・一・二〇)といわせたこの時の成瀬の手紙は次のようなものであつた。

親愛なる先生、私は数日前に先生の『ペートルヴェン』と『ミレー』を、そして今日『トルストイ』を読みました。こ

の本を読み終つてから、部屋を出て庭の中を散歩いたしました。陽が沈むところでした。そして空には仄かな紅の色合いが残つておりました。風が非常に強く、寒い夕でした。私は樹木の梢から葉が散るのを見つめておりました。大きな黒い鳥が澄んだ空を横切つて飛んでいきました。私の眼に涙が浮かんできて、私は大きな孤独を感じました。私は自分の弱々しさと無力さを感じたのです。……私が立つておりました、どこからか、私の犬が走りながら足許へやつてまいりました。犬は尻尾を振りながら私の足をなめ、物問いたげな様子で私を見上げるのでした。私は非常に人間的な気持になりました。私は犬の頭を撫でてやり、ベンチに腰かけ、犬を傍に坐らせました。私は自分の頬に犬の頬を触れあわせてたまま、犬を腕のなかに抱いておりました。またもや眼に涙が浮んでまいりました。そして私はまた犬の頭を撫でてやりました。これは私にとつてただの犬ではなかつたのです。私は非常に人間的な気持になりました。どういふ気持だつたのか……存じませんが、部屋に戻つたとき、そこにある一つ一つの物が、私の力への憧れをかき立てるのでした。そして、私はじつとしていられなくて、あちこちと歩きまわりました……

「そのとき、『トルストイ』を翻訳しようという熱望が生じたのだ。彼はその欲求を熱烈に表明している。」(「戦時の日記」村上光彦訳)

ローランはこの手紙に快く承諾の返事(これは訳書の巻頭を飾

っている)を書いてゐる。仕事は京都にいた菊池を除いた同人が英訳本から分担訳出し、それをフランス語のできた成瀬が原典に当っていちいち確かめるといふ方法をとつたらしい。そして新潮社から成瀬の名前で大正五年の三月に発行された。小型の本(中判三五〇頁、定価九十五銭)ながら装幀なども見映えがし、造本もしっかりした美本である。同人中一番早く成瀬は自分の本をこのようにして持つことができたのである。「序」に「翻訳に就いて、多くの友人諸君の世話になつた。特に仏蘭西婦人を母君とせられる山田菊子嬢は、煩雜も厭はず丁寧に難解な所を教へて下さつたし、豊島与志雄氏も、多忙な時間を割いて原稿を見て下さつた。その他芥川龍之介・久米正雄・松岡善護の三氏は、手を分けて英訳書と原稿とを対照して下さつた。右の諸氏の援助なくば、この不満な拙訳すらも公にすることが出来なかつたらうと思ふ。私は諸氏に、衷心から感謝する」のことが見える。右の文中の山田菊子という女性は、成瀬のフランス語の家庭教師である。ところで、『早稲田文学』大正五年五月号の新刊紹介欄はこの本をとりあげ、「訳文には苦心の跡あり」とあらはれ、所謂翻訳書によく見る翻訳臭もなく、いかにも高雅な、よみよい日本文となつてゐる。翻訳文学としても恐らく近時に於ける最も成功したものの一つである」と激賞している。とにかくかなり急いだ仕事ではあつたが、この企画は当り、印税は創刊号を出すに十分であつた。

若き成瀬正一とロマン・ローランとの国境を越えた精神的交流は、『トルストイ』翻訳出版を生み、第四次『新思潮』創刊にま

つわるさわやかなエピソードを残した。それはまた日本におけるロマン・ローラン移入史の最初の一ページを飾るものともなつたのである。

第四次『新思潮』は大正五年二月創刊号が出るが、成瀬はこの雑誌に次の諸作を載せてゐる。

大正五年二月創刊号

骨晒し(小説)

四月号

最初の石(小説)

五月号

罪(小説)

六月号

ロオラン氏の手紙

十一月号

航海(小説)

紐育より

大正六年一月号

囚人と小さき花(戯曲)

一人と独り(小説)

紐育通信

紐育より(二)

漱石先生追慕号

創作に於ける個人性と文芸批評(論文)

紐育より(四)

第一作「骨晒し」は、暴風雨の日本アルプスの山小屋が舞台である。「芸術も宗教も悉く詩的化して、美しいもの、遠くにあるもの」として考える青年を主人公とし、その理想主義的生き方を描いている。嵐の夜、山小屋の主のような老人が、奇妙な話を語る。昨年冬遭難した村の狼師の死体がまだ引きあげられず、骨さらしとなつて、その谷の近くに行くとおぼつてくれ、水飲

ましてくれと叫ぶというのだ。たまたまそこにおいてその話を聞いた青年は、その夜興奮のため眠れず、骨を取ってその妻に見せ、大地に埋めてやろうと決心する。そして初めて真の善をなし得ると思つて喜悅すること。翌朝、青年は自分のしようとしていることが「真の人間のすること、即ち真の芸術家のすることだ」と思ひながら、悦びにもえて骨さらしの谷に向うのである。若き情熱にもえた、ナイーブな理想主義者成瀬正一の一面がよく出ている作品である。「骨晒し」というやや突飛な題名にもかわらず、内容は素直で、白樺派の武者小路や長与善郎の初期の作風にも通じるものがある。が、何としても作品のプロットと作者の觀念とがひとつに溶けあつていないのが欠点であつた。それは同じ号に載つた久米の「父の死」の抜群の自然描写や流れるような文章、芥川の「鼻」の気のきいた表現や完成された構成、見事なテーマ設定……こういった小説道の本筋からは遠いのである。この号の「編輯後に」に成瀬は次のように書いてゐる。

私は「骨晒し」を書いた後で、つくづく自分の微力を感じて、出すのが恥かしかつた。他人がその点で私を攻撃するなら、私は甘受する。併しあんなものは、宗教だとか感想だとか、或は、芸術でないとか云ふなら、私は氣持が悪い。私は自分で芸術家と云ふ概念を作つて、それにならうと努めることとなぞ一番厭だからである。私はあんなものしか書けない。これからもあんなものばかり書くつもりで居る。若し誰かが私を芸術家でないとか云ふならそれでもいい。私は「芸術家」にならうと思つて努力して居るのでないから。

觀念的で、ややあいまいな感想ながら、作品の未熟さは自ら認めていたのである。この創刊号を読んだ漱石が、芥川に激賞の手紙（大5・2・19付）を寄せたことは、よく知られたことであるが、その中に成瀬の「骨晒し」にふれたところがある。

——成瀬君のものは失礼ながら三人の中で一番劣ります。是は当人も巻末で自白してゐるから蛇足ですが感じた通りを其儘つけ加へて置きます。

三人とはいふまでもなく芥川・久米・成瀬である。そしてこの時の芥川への讃辞と成瀬への貶評とが、奇しくも後の文壇の成功と不成功とを物語ることとなつた。

『新思潮』四月号には「最初の石」という小説を載せている。

これは良心的な医師の苦悩を描いたものだが、同じ号の松岡の「河豚和尚」、久米の「手品師」に及ばない。この期の成瀬の作では、五月号に載せた「罪」が比較的良好に書けている。それは体験を素材としたためか、無理がなく、筋の運びは自然である。

こうして創作に夢中になつてゐたため、六月の卒業試験では藤岡勝二担当の言語学に失敗し、芥川に運動してもらつたということなどもあつたが（大5・6・21付藤岡藤六宛芥川書簡）、「批評家としてのマッシュウ・アーノルド」を卒論に、大正五年七月、成瀬は東大を卒業し、ただちに欧米留学の途につくのである。

三

大正五年八月三日、横浜解纜の静岡丸で、成瀬はアメリカに向け出発した。芥川の「出帆」という小品がこの時の模様を伝えて

いる。出発間際の七月下旬、彼は他の同人につれられ、前々から深く私淑していた漱石を訪れ、長らくの念願を果した。

成瀬の留学は、父正恭の要望と彼の希望とが一致して実現したのだが、留学への期待は父子の間でかなりのくいちがいがあった。父はポスト・グラデュエートでマスター・オブ・アーツの学位をとることを目的として留学を勧めたのだが、本人は視野を広め、いいものを吸収することをその目的とした。したがってアメリカに着いた成瀬は、ニューヨークでコロンビア大学の大学院に入るが、そのつまらなさに失望し、断然退学の決意をする。そして八階の自室に日を送り、創作と文学研究と美術館通いすべての時間を捧げることとなる。その成果は日本に送られ、『新思潮』の十一月号から誌上を飾るようになる。

「航海」はアメリカまでの船旅の模様を描いた小説である。描写は的確で読ませるものをもっている。「あなたの独探の話（航海中の）は新思潮で読みました。面白いです」とは、この年十一月十六日付成瀬あて漱石の手紙の一節である。「紐育より（一）」はその後の同名の通信文のはしりをなすものであり、「亜米利加の文壇―劇場―美術館」というサブタイトルがつき、ニューヨーク滞在一か月の印象を語ったものである。大正六年一月号の『新思潮』には四編の成瀬の作品が載った。他の同人が皆一編なのに四つも載ったのは十二月号が休刊になり、送った原稿がたまっていた故による。このうち戯曲「囚人と小さき花」は佳品である。重罪人を追放する殖民地を舞台とし、老いたる囚人に人生の重さを語らせ、一方に反逆的な若き囚人や無理解な看守を描き出して

る。着想とテーマのよさが光る作品である。「一人と独り」は、小説とはいえ通信文に近いもので、ニューヨークの first impression を綴ったものである。第四次『新思潮』は、大正六年三月漱石先生追慕号を出して廃刊となるが、この号に載った成瀬の「創作に於ける個人性と文芸批評」は、I II IIIの部分から成る約三十五枚の論文で、「要するに批評は、創作と云ふことになる」という結論を導くまでに、えんえんと筆を弄したものである。「この批評論は未来の完成すべき私の批評論の序論にすぎない」（大5・11・26付松岡善護宛）というが、その意気込みは論全体にみまぎっている。そのことは同じ号の「校正の後に」に、「私の心意の要求は、私に、創作を命じつゝ、しかも亦、同時に、学研的仕事を命ずるのである」と書き、さらに編輯発行人の松岡に、「私はあの論文を書いて如何に自分が不用意なるかを知った。常には既に解決してゐたと思つたことも、ペンを執つて見ると dogma であることに気がついたり、その dogma 自身も、実にいゝ加減なものなることを知ることが出来た」（大5・12・18付）と書き送っていることからもうかがえる。とにかく後の学者成瀬正一誕生の萌芽をここに見ることができるよう思う。また、この論には漱石の『文学論』が意識されている。菊池によれば「成瀬は創作の方面では余り影響を受けなかつたが、文学者としての先生に深く私淑して居た。成瀬と文学の話をして居るとよく『文学論』や『文学評論』が引合に出された」（漱石先生と我等）といひ、また漱石の『文学論』のような文学論を書くんだと口癖のように云っていた（友と友の間）というが、成瀬には学究的素養の上に立

って創作をする漱石がいつも意識されていたのである。大上段にかまえたこの論は、そのあらわれの一つといつてよからう。

さて、アメリカにおける成瀬は、コロンビア大学の講義に失望すると、創作と文学研究と美術館通いに日々を送ることとなる。

「Authority を以て声明する力を養ふ」(大5・10・21付松岡善謙宛)ことを念願にしていた彼には、ロマン・ローランが一つの指標であった。ニューヨークに着くや早々ローランに「私はあなたが聞われ、また苦しまれているがゆえに、あなたを大いに尊敬し、あなたに深く共鳴します」(「戦時の日記」より引用 蛇原徳夫訳)と書き送り、「ああ現れたちの友愛! 深淵を越えて差し出された手!」(同上)とローランを感動させ、一方、ローラン崇拜者でかためたアメリカのヤンガー・ジェネレーションの同人雑誌 *Seven Arts* の仲間と交わり、その雑誌に *The Spiritual Revolution of Contemporary Japan* という評論を書いている。それは編集者が *Young Japan* と改題しているが、明治から大正初期における日本の思想文化の変遷を英文で論じたものであった。彼はこの時四十ドルの稿料をもらい、二十五ドルを『新思潮』のため日本に送金している。大正六年四月十三日付『新思潮』同人諸兄あて成瀬の書簡にはこの事情を示す次のような一節が見られる。

余の *The Spiritual Revolution of Contemporary Japan* [発行者が *Young Japan* と改題せり] を(せし) *Seven Arts* 四月号、一部送りたり。右はただ *Sketch* のみにて出賃目的のものにつき、あまり重要視する勿れ。あれに対して余は40\$

の報酬をうけ(中25\$は日本へ送れり)、大に米国の人に知られ、日本のことに就きて、いろいろかくべき注文をうけしも、余はかくの如き仕事に時を用るはあまり快しとせざる所なるを以て、一切ことわりたり。

コロンビア大学に失望した成瀬は、次にハーバード大学の大学院に「Vater」の強請黙しがたく(大6・11・23付松岡善謙宛)入学し、哲学及び文学の講義をきくこととなる。しかし、ここでも彼の若い情熱は充されず、わずかに *New Laocoon* の著者 *Iv-ing Babbit* の講義に幾分の興味を感じたにすぎなかった。松岡善謙はこの時のバビット教授の講義が名著「ルッソーと浪漫主義」ではなかったかと思われるといい、後の成瀬の仏文学研究に影響ありとしている。(成瀬正一君の思ひ出) 昭11・7『文芸春秋』情熱が満されぬままアメリカに滞在している成瀬にとって『新思潮』は唯一の拠り所であり、心の故郷でもあった。彼はこの雑誌に拠って己の文学を築いていくつもりだった。先にも記したように成瀬は『新思潮』を「同人の *friendship* の *symbol*」としてとらえていた。そして雑誌を維持するために会費制として月々各自が受持った金額でも一番多く負担していた。ニューヨーク滞在中も彼はしばしば苦しい中から送金している。松岡にあてた書簡には何度もこの送金記事を見ることが出来る。いくつか抜き取っておこう。

○金十五弗(日本ノ金ニスレバ三十円)送るから受取つてくれ。もう少し沢山送りたいが、今は中々苦しい。冬の中着換もない有様だ。(大5・10・6付はがき)

○金十五弗送る。葉書に云つたとほり三十円以上になる筈だ。晩くなつて失敬した。アメリカは苦しい。(大5・10・11付書状)

○金は一月になつたら少くとも十五弗送るから、今少し辛抱してくれ。それは私が毎日／＼内職して儲けた金だ。こんなことを云ひたくないが君にのみ云ふ。私は毎日／＼二月ほど浮世絵の説明をするため、市内のある蒐集者の所へ通つたんだ。(大5・12・20付書状)

○別送の二十五弗は私の内職の金だ。どうぞ新思潮経営費に投入してくれたまへ。実はもう少し送つて、百円余りある相な借金を払ひたいが思ふやうに行かない。僅か五十円だがゆるしてくれ。君の困難は察してゐるが、間もなく、何にかできやうと思ふ。私も出来るだけは送る。(大6・1・30付書状)

○私はこの手紙と共に苦心の貯蓄より成る金十弗を送る。私は敢へて苦心の貯蓄と云ふ。此頃のアメリカの物価の高いことは愕くばかりで、生きてゆくのも苦しい。Vaterにたのめば、少し多く送金して貰へるが、私は米國で学位をとらずに「学位をとる」とは「Vaterの希望」遊んでゐて(学校へ行かヌト云フ意味)、Vaterの気にそむいてゐるので、金を送るやうにたのむことは気が咎める。此頃は二食にしてやつと金をのこして送るんだ。(大6・4・26付書状)

○私は送金にBeatをつくしてゐる。私の今まで送つた百円(三十円、五十円、二十円)の金は実に私のBeatだ。(同右)

○昨日書留で金二十円(十弗の札一枚)送つたから昨年中と同

じ方法で日本の金になほしたまへ。これからもベストをつくして送る。芥や久米や菊池が出さなければなほ私は出すよ。一日二食にしても出すから安心せよ。(大6・4・29付はがき)

第四次『新思潮』が、理想主義者成瀬正一のこのような陰の力に支えられていたことは、特筆に値するだろう。

*この時の金額は、同人それ／＼の回想記によつてちがいがある。菊池によれば、それは芥川・久米・松岡が各三円、成瀬が十五円となつており(『新思潮時代の思ひ出』)、久米によると成瀬が菊池の分を含めて三十五円、芥川・久米・松岡が各五円となつてゐる(『風と月と』)。また創刊当時会計を担当し、印刷所の交渉などに當つていた松岡の比較的信頼がおけると思われる回想では、成瀬が二十円、松岡・久米・芥川が五円ずつ、菊池は会費免除というふうに記載されている(『若き日』『新思潮』時代の思ひ出)。

四

成瀬にとつて『新思潮』は何ものにも換え難い存在であつた。ニューヨークで雑誌を受取る度に、彼はその喜びを自分に代つて編輯発行人となつてゐる松岡に書き送るのであつた。

○雑誌の大きくなつたのは非常に嬉しかつた。私は室内を歩きまわつて喜んだ。三越の広告をつたことなんぞ、久米の大手柄だと思ふ。(大5・10・30付)

○十一月号の雑誌と八月号とを嬉しく受取つた。私はすぐよん

でしまつたが、芥川は益々腕が冴えて来て本当に羨ましい。

うまいもんだと思ふ。久米はいゝものを捉えたが、惜い所で失敗してゐるやうに思ふ。君の赤頭巾も面白くよんだ。……菊池の面白かつたが、どうせあゝ云ふものを書くならもつと

官能的にやつた方がいゝやうに思ふ。(大5・11・26付)

○一月号は非常に整つてゐる。私なんぞあんなものを書いて恥しい位だ。一月号では君のと菊池のがいい。時事の評を見た。とにかく月評にのるだけでもそれだけ地歩を得ただから嬉しい。(大6・2・12付)

この様な成瀬の期待にもかかわらず、第四次『新思潮』は大正六年三月の漱石先生追慕号を最後に後が続かなかつた。それは財政上の理由にもよるが、芥川や久米がこの雑誌を踏台に首尾よく文壇の仲間入りをし、他の雑誌にも書くようになったことが決定的な要因であつた。一年ほど前、熱烈な意気込みではじめた同人誌ではあつたが、各人の成長は同人間の結束をゆるめることとなり、創刊当時の意欲も失われたのである。「自分達は皆忙しい。従つて兎角雑誌の発行が不規則になりたがつて困る。が、これからは成るべく、これまでのやうな不規則のないやうに心掛ける積りである」とは漱石先生追慕号の「校正の後に」における松岡の発言だが、時の移りはいかんともし難く、この後はついに必ず終つた。成瀬にとつてこれは大きな打撃だつた。この雑誌に人一倍愛着をもち、その継続発行を願ひ、無理算段の上外国から多額の送金までしていた彼には、文壇に名が出たために同人誌に冷淡になるといふ日本にいる同僚の気持が理解できなかった。大正六

年四月十三日付でニューヨークから新思潮同人諸兄あてに出した彼の書簡には、この時のやり切れない悩みが読みとれる。長くなるがその一部を引用しておく。

——雑誌に対する諸兄の冷淡を私は可成憤慨してゐる。君等の名が、文壇的に多少高まつた折にさうなるのだから、(私のヒガミかも知れぬが)、実を云ふと、私はあまりいゝ氣持がしない。一体君等はどうか云ふつもりなんだ。私は自分の生国が亡びるやうな氣がしてゐる。夜なぞ Bed の中で(いやな言葉だが)涙が出る。こんな sentimental なことを君等は相手にしないかもしれないが、私は今可成腹が立つてゐる。Betty されたやうな氣さへする。

私は茲に君達一人／＼の(久米・菊池・芥川)雑誌に対する態度の説明を求めらる。

I 雑誌を立てゝゆくつもりか。

私はこんな問をする時が、さう早く(君等の文名が出て)来るとは思はなかつた。あまり idealistic かも知れないが、私はこんな時が来るのを考へもしなかつた。

II 立てゝゆくつもりなら、どの位の努力(資金もよくむ)を支出するつもりか。

私はアメリカへ来てから物価が高いし、周囲に立派な絵や本があるので、金の中々のこらなかつたので、(敢へてかく云ふ)内職に労働して八十円を送つたんだ。これも、君等が私と同じく雑誌に熱心だと思つてゐたので、私は出すのを自分の義務と信じて、イヤな浮世絵の説明をしたり

原稿をかいたんだ。

Ⅲ金が要るなら、雑誌をやめるか。

こんなことを云ふのは、君達に対する侮辱ときへ思ふ。併しどうも最近の君達の態度はこんな間にも相当すると思ふ。

Ⅳこの後（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを総合したものが）雑誌をどうするつもりだ。私は諸兄の答をききたい。君達はそんなに interest にばかり動く人間ではあるまい。

他の雑誌に対しても、新思潮のやうに金を出さずに、自分のすきなものを書いて、しかも金が入るから、新思潮をよすと云ふのか。私は幸に自分の文名が高まつても、そして又、自分のすきなものを原稿料をもらつて他の雑誌にのせられても、新思潮は、吾々五人の FRIENDSHIP の symbol として、否 friendship それ自身として、育て、行くのが理想だ。理想であつた。吾々五人の成長してゆく記録として、吾々五人の home としてゆくつもりであつた。

少し文名が高まつたから、止すのはあまりに見下げはてた心と思ふ。

理想主義的情熱にもえた純な青年成瀬には、お人好しながら打算的な久米や、冷静な都会人で、成瀬の目には「燃焼しない男」（芥川「出帆」として映る芥川のとつた態度が、どうしても理解できないのであつた。同年四月二十六日付松岡宛書簡にも「若し久米芥川が、創作を断念（一生涯）せしと、どうしても金がな

いとか云ふ理由で、止むを得ず、雑誌をよすなら、仕方なければ、彼等は決して創作を中止せず、否益々多作し、しかも金は益々もうかり、名は高まるに至つて、冷淡となるは憎悪すべき、恥づべき、不徳義な行と云はねばならぬ」とまで書いてそのやり切れない気持ちを訴えている。

『新思潮』に期待し、それにかけていたといつても過言ではない成瀬は、大正六年四月号が出ないまま、しばらく休刊九月からを期す、という事情が伝えられるに及び、絶望的になつたらしい。そしてジェームス・トムソンの The City of Dreadful Night というペンシミスチックな詩におぼれたり、フロリダやカナダへの旅に不満を晴らすこととなる。こうしてホーム・グラウンドを失つた成瀬は、そのポストン便りを大正六年十二月、菊池のいた時事新報に連載、また同じ月の『帝国文学』には「フロリダ行き——（亜米利加通信の一）——」を載せている。以下「カナダの旅行——（亜米利加通信の二）——」（大7・2『帝国文学』）、「瑞西の旅」（大8・4『中央公論』）、「瑞西日記」（大8・8時事新報）、「瑞西の旅」（大9・2『人間』）といくつもの紀行文がつぎつぎと発表されるが、この時期の成瀬の文章はみずみずしい情感と情熱に満ちたものとなつた。

アメリカ生活への幻滅と『新思潮』廃刊の打撃は、成瀬を激しくいらだたせ、かねてあこがれのフランスへ、第一次世界大戦中のヨーロッパへ行くことを決心させる。大正六年五月二十五日付松岡・菊池両名あて書簡には「……私は desperate になつたので、先日書き送つたやうに、フランスの Schlachten feld へ行くこと

にした。生きて更に強くなつてかへるか、死んでしまふか、どつちかにするんだ。私の今として、この外路がない。私は戦場で悲惨な Realität と面接して、英、独、仏の負傷兵を救ふ赤十字に投ずるつもりだ」とある。ローランやヘッセの人道主義の影響を受けていた熱血漢の成瀬には、義勇兵にでも志願しかねない一面があつたのである。両親は彼のフランス行きに強く反対したが、成瀬は決意をまげなかつた。そして一年半のアメリカ生活に別れを告げ、大正七年三月二十二日望みなかつてフランス行きの船に乗り込む棧橋の上で、母の急逝を知らせる電報を受取ることとなる。この打撃にもめげず成瀬は戦禍のフランスを遍歴し、イタリヤからスイスにロマン・ローランを訪ねるのである。(ローランの「戦時の日記」には、七月二十日ヴィルヌーヴ着、十五日間滞在し、八月四日に去つたことがしるされている。) この時の記録が、大正八年五月号の『新潮』に載つた「或夏の午後―ロオランとの一日―」である。これはジュネーブ湖畔にローランを訪ねたある夏の午後の模様を綴つたものである。詩人成瀬の面目が一番発揮されているのは、この一篇だと私は思う。九枚ほどの短篇ではあるが、文章は湖畔の風景を的確にとらえて美しく、ローラン

は黙して語らずも、その偉大な姿をとどめている。成瀬正一の名が記憶されるとしたらこの「或夏の午後を」頂点とする感奮に満ちた紀行文でなくてはならぬ。

さて、『新思潮』という発表誌を失ない、創作を断念した彼は、やがて十八・九世紀のフランス古典文学に深く沈潜していくこととなる。そして、後に九州帝国大学法文学部教授としてフランス文学を講じる学者成瀬正一の誕生を見るのである。その三度に及ぶ渡仏時代の様子や、フランス文学者としての業績――特に没後出版された大著『仏蘭西文学研究』一、二輯(白水社)についてもふれたいところだが、今回はその『新思潮』時代を中心に述べることにとどめ、擱筆する。

(付記)

本稿を成すに際し、成瀬正一書簡閲覧の便を与えられた松岡筆子未亡人、および右書簡の公表を許された成瀬福子未亡人に紙上厚くお礼を申し上げます。